

# 燃える松明

## ——アブラハムの経験した神の愛

創世記 15 : 1-12、17-18

ルカによる福音書 13 : 31-35



司祭 ヨハネ 井田 泉

2025年3月16日

大齋節第2主日

聖光教会にて

今日の旧約聖書、創世記第 15 章は遠い昔の物語です。アブラハムとサラ、またその一族は、神の言葉に従って長い旅をしてきました。今はカナン（今のパレスチナ）の地、ヘブロンという町の近くのマムレの櫛の木のそばに天幕を張って住んでいました。神からは子孫と土地を与えるという約束を受けたのですが、現実には子どもは与えられず、異国の人々に囲まれて不安と緊張の中で過ごす日々でした。長く神の声を聞くことがないままに、時が過ぎていきました。

しかし神はこの日、ついに沈黙を破ってアブラハムに語りかけられました。子孫を与える約束を確認して彼を励まされたのです。夜でした。彼は主に促されて天幕の外に出て、満天の星を仰ぎました。主は言われました。

「天を仰いで、星を数えることができるなら、数えてみるがよい。あなたの子孫はこのようになる。」

「アブラムは主を信じた。主はそれを彼の義と認められた。」と記されています（創世記 15:5-6）。

主はまた彼に言われました。

「わたしはあなたをカルデアのウルから導き出した主である。わたしはあなたにこの土地を与え、それを継がせる。」15:7

そう言われてアブラハムは、これまでの長い年月と曲折の中にも主の導きがあったと思うと、心にしみるものがありました。けれどもなお不安があります。約束の確かさがほしいのです。

「わが神、主よ。この土地をわたしが継ぐことを、何によって知ることができましょうか。」 15:8

彼は主にしるしを求めたのです。

すると主は答えてこう言われました。

「三歳の雌牛と、三歳の雌山羊と、三歳の雄羊と、山鳩と、鳩の雛とをわたしのもとに持って来なさい。」 15:9

アブラハムはその意味を理解しました。主は、契約の儀式的準備をするように言われたのです。彼は、主が言われたとおりに、それらの動物をみな持って来て、真っ二つに切り裂いて、それらを互いに向かい合わせに置きました。ここに主を迎えるのです。

契約は非常に重要なものです。たとえば二つの集団が一つの井戸を使うときに、使い方を決めて契約を結ぶ。そのとき、動物を二つに切り裂いて、それを向かい合わせに両側に置き、その間を契約の両方の当事者が通る——これが当時の契約の仕方でした。もし契約を破れば、この動物のように自分の身が二つに切り裂かれてもよい。そのように命をかけて行うのが契約だったのです。主なる神はこのやり方を用いて、アブラハムとの間に契約を行おうとされる。ご自分の命をかけてその約束を保証しようとしておられる。自分も命をかけて主に忠実を果たそうと、アブラハムは決意しました。

ところが動物を用意して数時間、主の次の指示をじっと待っていました。何も起こりません。禿鷹が動物の死体を狙って舞い降りてきます。大切な供え物を食い荒らされないように、アブラハムは棒を持ってそれを追い払いました。長時間これを続けたのですっかり疲れてしまいました。

**「日が沈みかけたころ、アブラムは深い眠りに襲われた。すると、恐ろしい大いなる暗黒が彼に臨んだ。」 15:12**

日が沈みかけた頃、彼は深い眠りに落ちました。そのとき、アブラハムは恐怖に襲われ、深い暗黒の中に閉ざされたのです。その恐怖と暗黒の中で、主の言葉が聞こえました。今日の聖書日課からは省かれていますが、彼は、将来の彼の子孫の異国での苦勞と、そこからの脱出のことを聞いたのでした。

日が沈み、暗闇に覆われた頃です。アブラハムは眠っているのか覚めているのかわからない状態でした。

**「突然、煙を吐く炉と燃える松明が二つに裂かれた動物の間を通り過ぎた。」 15:17**

突然、煙を吐く炉と燃える松明が、あの裂かれた動物の間を通り過ぎて行くのを彼は見ました。神が燃える松明となって通って行かれる。松明の火の熱と輝きがアブラハムに注がれます。主の臨在の恐れと深い感動が全身を包みました。

主は、契約の当事者として、裂かれた動物の間を通り、みずからの命をかけて約束を保証されました。けれども主は、アブ

ラハムには動物の間を通ることをさせられませんでした。主がひとり、すべての責任を引き受けてくださったのです。アブラハムの弱さを知っておられたからです。

これが神とアブラハムの契約です。神とアブラハムは固く結ばれたのです。アブラハムは精一杯、信仰をもって主に従うことを誓ったと思います。

ところで、あの燃える松明とは何でしょうか。それは神の燃える愛です。どのような時にもアブラハムを守り導く。ご自身の信仰の民を守ろうとされる神の愛の炎が、松明となって燃えていた。それを彼は経験したのです。

しかしこれは、過去の不思議な物語で終わったのではありません。あのアブラハムが経験した燃える神の愛が、形をとって現れた。肉体となって、地上に、わたしたちのところに來られた。それがイエス・キリストです。イエスのうちに神の愛が燃えています。

今日の福音書です。

ガリラヤの領主ヘロデがあなたを殺そうとしている、と聞かれたイエスは少しもひるまずにこう言われました。

「今日も明日も、悪霊を追い出し、病気をいやし、三日目にすべてを終える。」ルカによる福音書 13:32

「わたしは今日も明日も、その次の日も自分の道を進まねばならない。」 13:33

迫害があろうと、命の危険が迫ろうと、わたしは神から使命として与えられた働きを決してやめない。今日も明日も、その次の日も自分の道を進み、それをなす続ける。

「エルサレム、エルサレム、預言者たちを殺し、自分に遣わされた人々を石で打ち殺す者よ、めん鳥が雛を羽の下に集めるように、わたしはお前の子らを何度集めようとしたことか。だが、お前たちは応じようとしなかった。」 13:34

イエスはここではっきりとご自分がエルサレムで殺されることを覚悟して、こう言われたのでした。

ここで注意したいのは「めん鳥が雛を羽の下に集めるように、わたしはお前の子らを何度集めようとしたことか」という言葉です。

イエスは人々を、反抗する人々をさえ、招き集めようとしてこられた。めん鳥が雛を羽の下に集めるように、人々をご自分の愛のうちに育もうとされた。

この招きを受けているのがわたしたちです。主イエスはわたしたちを招き集めて、ご自身のうちに育もうとされています。

ところでここで「羽」と訳された言葉は「翼」と同じです。「翼」は、神の愛と保護を表現する言葉として旧約聖書に何度も用いられてきた大切な言葉です。

かつて神は出エジプトの民にこう語りかけられました。

「あなたたちは見た／わたしがあなたたちを鷲の翼に乗せて  
／わたしのもとに連れてきたことを。」出エジプト記 19:4

また詩編の中にはこのような祈りがあります。

「瞳のようにわたしを守り／あなたの翼の陰に隠してください。」 17:8

イエスは愛の翼を広げてわたしたちを集め、守り、導かれる。そのためにはご自身の命を差し出されます。事実イエスはご自身を献げて十字架に死なれました。そのとき、釘と槍によって体が裂かれました。

アブラハムのあの燃える松明とイエス・キリストの十字架はつながっています。けれども違いがあります。あのとき、二つに裂かれた供え物は動物でした。しかしイエスは自らを神への供え物として、身を裂かれたのです。

イエスはわたしたちを限りなく愛し、わたしたちを守り生かすために死なれた。言わば十字架は、わたしたちのために燃える愛の松明です。このイエスの十字架に、わたしたちは神の燃える愛を見るのです。

「わたしたちがまだ罪人であったとき、キリストがわたしたちのために死んでくださったことにより、神はわたしたちに対する愛を示されました。」ローマの信徒への手紙 5:8

パウロはこう言います。

お祈りします。

神さま、あなたがわたしたちを愛してみ子をわたしたちにお与えくださったことを感謝いたします。み子主イエスのうちに燃える愛によって、わたしたちをすべての災いと悪しき思いから解放してください。尊い愛を感謝し、主のみ名をほめたたえます。アーメン

(古代イスラエルと現代のイスラエル国家はまったく別です。聖書の言葉を根拠にパレスチナに非道を行うことは許されません。)